

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2954 号	氏名	岡山 雄亮
審査担当者	主査	石竹達也	(印)
	副主査	谷原真一	(印)
	副主査	坂邊 浩	(印)
主論文題目： Impact of airflow obstruction on long-term mortality in patients with asthma in Japan. (日本における喘息患者の長期生存率に関する気流閉塞の影響)			

審査結果の要旨 (意見)

大気汚染の認定患者（大牟田市大気汚染関連健康被害コホート）の内、喘息患者の長期予後に気流閉塞の要因が関連するかを明らかにすることを目的に、約 26 年間にも及ぶ後向コホート研究である。1974-1988 年に認定された 3,146 人の中より大気汚染関連喘息の定義に当てはまる 697 人について全死亡と呼吸器関連疾患死について検討を行った。これまで喘息患者の長期予後については十分わかっていなかったが、今回のコホートにおいて大気汚染関連喘息患者の予後を規定する要因として、気流閉塞が独立した死亡リスクであることを明確に示した。これは今後の臨床での患者教育や気道閉塞改善に寄与する治療法の積極的取組が有用であることを示す有用なエビデンスを提供しており、学位の授与に値するものと評価する。

論文要旨

日本における気流閉塞を伴う喘息患者の長期予後はわかっていない。26 年間の後向研究の目的は気管支喘息における長期的な死亡リスクを調査する事である。

大牟田市大気汚染関連健康被害コホート研究のデータを用いて日本人による気流閉塞の死亡リスク比について分析した。気流閉塞とは、肺機能検査で $FEV1.0/FVC < 0.7$ か $\%FEV1.0 < 0.8$ とした。

慢性呼吸器疾患をもつ 3,146 人の健康被害者の中から成人喘息患者である 697 人（最終分析）が抽出された。追跡期間の中央値は 26.3 年であった。気流閉塞のあるグループでは気流閉塞のないグループに比べて呼吸器疾患や喘息発作での死亡率が著しく高かった。気流閉塞は呼吸器関連死亡率および全死因死亡率の両方に対する独立した危険因子であった。気流閉塞が重度であるほど予後の不良であった。

この長期コホート研究は、気流閉塞を伴う気管支喘息が独立した死亡リスクであることを明らかにした。気流閉塞を防ぐことが喘息患者における長期死亡率を減らすことにつながることを示唆された。